

わたしたちは4月12日主日にイースターを個人々々、それぞれ家庭などでささやかに過ごしました。そしてまもなく5月31日はペンテコステを迎えます。このペンテコステは、ギリシア語で、五旬節と訳します。アメリカのペンタゴンも五角形という意味でおなじギリシア語由来です。このペンテコステはユダヤ教の三つの大きな祝祭の一つです。小麦など穀物の収穫を感謝する祭り、過ぎ越しの祭の後50日目にあたるものです。過越の祭とは、古代エジプトファラオ王朝の時代に、イスラエルの民が奴隷として苦しんでいたところ神さまがモーセという指導者を立ててエジプトから脱出し、奴隷から解放されたことを祝う祭りです。

この過越の祭りの前日にイエスは十字架につけられたと福音書には記されています。そこから50日数えると、今年、5月29日ですが、その直近の日曜日、5月31日をペンテコステとしてお祝いするのです。ちなみにユダヤ教の暦は太陰暦ですから、太陽暦では毎年、過越の祭の日も変わるし、イースターもペンテコステも変わってくるわけです。このイースターからペンテコステの期間、教会の暦にしたがって、主イエスが十字架で死なれ、復活なさり、神のもとにもどられる、しかしやがて神のもとから聖霊がわたしたちのもとに降ってくるという一連の出来事を覚えるのです。

このように、もともとユダヤ教から分かれて独立したキリスト教の、イースター、ペンテコステ、クリスマス

などの祝祭とおなじ時にユダヤ教では、過越の祭、収穫の祭り、ハヌカなどを祝うことになっているわけです。そしてユダヤ教では、隷属からの解放の後、神からモーセの十戒、律法を与えられたイスラエルは、ただ律法によつてのみ、救いに至ることができると説かれているのです。つまり神とひととの間には律法しかないのです。ところがキリスト教はその律法を捨て去ったのです、いったいキリストを信仰するひとたち、わたしたちには何が、救いなのでしょう。

先週木曜日に遅いスタートを切った神学校のオリエンテーションが、青空の下でようやく開かれました。自己紹介の際に、ある神学生は、家庭がキリスト教とはまったく無縁だったが、出会うひととびとによつてキリスト教に導かれてきた生い立ちを語ってくれました。彼の話を通して、おそらく決定的だったと思われたのは、彼が高校を受験する前後、父親の海外赴任のために家族と別れて、二年間の居候の生活を通してだったと思われました。彼が住まいを与えられた家族は、福島から出てこれた町田に住まいを得たと言います。その家族の祖父母、おじいさんの方は、話からして神学校の農場職員として町田に出てこられたと推測します。広大な敷地に牛を二十頭、豚を百頭などの大規模な農場があったそうですから、開校当時、農村伝道神学校は福島などから農民を職員として雇ったそうです。…このあたりは禿先生にお尋ねください。おじいさんの方は、寡黙でただ目の前にある仕事にいそしむ方だったようです。その家族のおばあさん、無学な方だったということでしたが、そのおばあさんがヨハネによる

福音書の「はじめに言葉があった」というところを語って聞かせてくれたときに、その神学生は何かとても大切なことを受け取ったようです。わたしが思うに、このおばあさんはその言葉によって全存在が生かされているということ、確信させる方だったようです。

このような方には、喩え話も解釈も、まして神学の書物もいらぬ方だと思います。キリスト、救い主としてイエスに出会った経験がおりなのでしょう。

25 「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26 その日には、あなたがたはわたしの名によつて願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。27 父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。28 わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」

25節の「もはや喩えによらず、はっきり父について知らせるとき」とは、イエスが十字架につけられるときなのです。ここで「喩え」と訳されている言葉には二つの意味があります。そのひとつは「深い意味を湛えている知恵の言葉」です。イエスが弟子たちに語り聞かせた一つ一つの言葉は、弟子たちを、真理に導く含蓄のある言葉だったのです。

しかしそのような「喩え」としての言葉さえも、決定的なものではなかった、ヨハネによる福音書は冒頭で告げ知らせる：「ヨハニヤ 言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」というが、今や「わたしたちの間に宿られた」肉が、言となる時が、「もはや喩えによらず、はつきりと父について知らせるとき」である。すなわち十字架において、肉としてのイエスが死に葬られ、言葉としてのキリストがわたしたちに向かって、神についてあらゆるさまに告げ知らせるのです。

イエスの死によって、神とわたしたちの間には、だれも介在する存在がなくなつたのです。弟子たちはイエスを愛した、そしてイエスは神のもとから来られた方であると信じた、そのイエスの死において、肉は言葉となり、一切の介在するものなしに、神が弟子たちを愛しておられることを知つたのです。

イエスが弟子たちにご自分の死をおして肉が言葉となり、神の愛を示されたことを、わたしたちの日常においてどのように受け止めたらよいのでしょうか？——わたしたちには何もなすべがないような困難な状況におかれるときが、あります。そのような状況でわたしたちには祈るといふ行為だけが残されているそんな困難に見舞われるときがあります。生活が外的な条件で充されているときには、わたしたちの脳裏には、「はたして祈りは聞かれるのか？」「もっと冷淡にいえば、「祈りは客観的にみてわたしにいったい何をもたらしてくれるのか？」と問う自分があることがあります。もしもそのような問いが許されるときがあるとするなら、人生においては数えるほどしかあり得ないでしょう。なぜなら自分の肉と

しての命、霊の命のすべて、全身全霊をもって祈ることは極めて難しいからです。特にさまざま環境において充されているときには、極めて困難だからです。「心＝霊が貧しいものは幸いなのです」。

29 弟子たちは言った。「今は、はつきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。30 あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」

詰まるところ、神に問いかけているわたしたち自身が問われる立場にいます。立場をゆずることによってわかることがある、それにどのようにしたら気づくことができるか、それが問題なのです。わたしたちがそれに気づく可能性をヨハネはここに書き留めています。

中部教区在任中の駆け出しの頃に隠退なさつた篠田潔牧師より小さな冊子をいただき目と目とまじり、そこにさりげなく書き記された文章に目がとまりました。「わたしは、具体的な自分の問題について祈るときに『ごつつかこの祈りを聞いてください。しかしこの願いが神さまの御心に叶わないのであれば、どんなことをしてもこの願い通りにならないようにしてください』と言います。そして願つたとおりに言葉運ばれた場合にはそれが御心になつたこととして了解します。そして感謝の祈りをします。もし願つたとおりに事が運ばれなかったなら、その願いは御心に合致しなかったことと了解します。」

弟子たちには、やがて十字架のイエスから、胡散霧散に逃げ去る時が来る、とヨハネはイエスの言葉を書き留めています。そのとき弟子たちは、神がどこにおられるかを問わざるを得ないでしょう。はたして、神は自分たちと共にいるのか、それとも自分たちの願いとはかけ離れていたゆえ見捨てた、救いの業、すなわち十字架のイエスと共におられるかを。救いは自分にあるのか、それとも十字架のイエスにあるのかを。主客逆転の救いの道が示されました。わたしたちにおいても、とてそこから解放たれることがない願望という形をとって主の座にとどまろうとする自分を放棄して、十字架の死に示された平和の道に自らを託すことができるよう、導かれたいと願います。

31 イエスはお答えになつた。「今ようやく、信じるようになったのか。32 だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰つてしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。33 これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝つている。」



